



瀬戸内国際芸術祭と地域社会における「状況の創造」をめぐって —ドットアーキテクト《UmakiCamp》の紹介

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 馬渡玲欧

1 はじめに

本報告では、2010年以來3年に1回開催されている瀬戸内国際芸術祭が瀬戸内の離島含む地域社会にどのような影響をもたらしているのかを探る調査の一環として、小豆島町の馬木地区にある、ドットアーキテクトによって建設されたUmakiCampを紹介し、その意義について考えてみたい。

さて、香川県小豆島は、小豆郡土庄町と小豆島町を含む、面積153.25km²・人口25,881人の島である（北川フラム・瀬戸内国際芸術祭実行委員会監修2022:105）。同島は、島遍路、醤油づくり、採石などで知られ、近年は年間300名程度の移住者の増加を見せている（北川フラム・瀬戸内国際芸術祭実行委員会監修2022:103-5）。また、同島は、『二十四の瞳』（1954年公開、壺井栄原作、木下恵介監督）のロケ地、近年では『からかい上手の高木さん』（2013-、山本崇一朗原作）のいわゆる「聖地」として知られている。このように、いわば豊かな「歴史的環境」（宮本2020:72-7）¹を有する小豆島であるが、同島は2010年の第1回から瀬戸内国際芸術祭に参加している。2022年開催においては、会期を通して島内に計55作品群・展示の設置がおこなわれた。以下、UmakiCampを建設したドットアーキテクトとUmakiCampの概要、フィールドワークから得た情報、UmakiCampの意義について、順を追って述べていく。

2 UmakiCampの概要

2-1 ドットアーキテクトの建築思想

最初に、ドットアーキテクトの建築思想の特徴を紹介する。代表の家成俊勝は次のように述べる。

1 ここで宮本は、片桐新自の議論を紹介している。歴史ある町並み等の「歴史的環境」の重要な構成要素として、「人びとが日々の暮らしを送る光景そのもの」が挙げられる（宮本2020:73）。詳細な定義は片桐編（2000）を参照されたい。

ドットアーキテクトの仕事の特徴のひとつは一般的な建築設計だけにとどまらず、施工や、イベント企画、アートプロジェクトへの参加、パフォーマンス、スペース運営など多岐にわたることである。時間的にも、長く建っているものから一時的に建て壊されるもの、たった20分程度で終わるものもある。(家成 2020: 5)

ドットアーキテクトの建築思想は、アートプロジェクトとの親和性が高いように思われる。「アートプロジェクト」の外延をひとまず確認しておく、それは現代美術を中心に、おもに1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動である(熊倉純子監修 2014: 9)。作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入り込んで、個別の社会的事象と関わりながら展開される(熊倉純子監修 2014: 9)。既存の回路とは異なる接続／接触のきっかけとなることで、新たな芸術的／社会的文脈を創出する活動といえる(熊倉純子監修 2014: 9)。また、以下の特徴を持つ。1. 制作のプロセスを重視し、積極的に開示／2. プロジェクトが実施される場やその社会的状況に応じた活動を行う、社会的な文脈としてのサイト・スペシフィック／3. さまざまな波及効果を期待する、継続的な展開／4. さまざまな属性の人びとが関わるコラボレーションと、それを誘発するコミュニケーション／5. 芸術以外の社会分野への関心や働きかけ(熊倉純子監修 2014: 9)。特に今回紹介する UmakiCamp は、制作のプロセス、さらにその後の場所の継続が地域内外に開かれたものであり、島を訪問する人びととのコミュニケーションや協力を促すものである。さらにそのような取り組みは、後述のように、島の抱える社会的課題を背負われている節がある。

先述のとおり、ドットアーキテクトは、小豆島においては、「UmakiCamp」という建築物の建築・設計で参加をしている。家成による「UmakiCamp」についての解説を参照したい(家成 2020: 44-9)。まず、UmakiCamp は、「集会所」としての位置づけがなされている(家成 2020: 44)。この集会所という「場」に関して、「場のあり方のお手本となったのは、2008年のG8北海道洞爺湖サミットの際に立ち上がった、マスメディアと違う視点で情報を発信する市民メディアセンターである」(家成 2020: 44-5)とされる。同場所の建築の背景には、「オルタナティブな公共空間を物理的につくり、地域の人々が自発的に関わり、既存施設ではバックアップできない町の活動を行っていけるような機会をつくり出したい」という考えがある(家成 2020: 45)。

さらに、UmakiCampの建設においては、人口減少と少子高齢化が課題となる島で「誰かに頼るのではなく自主的に自分たちの状況をつくり出していくことが必要」(家成 2020: 45)であることが念頭に置かれている。セルフビルドであることに加え、私見ではその場の使い方についても工夫が見られる。「敬老会の演劇」という地域の習慣にも助けられながら、1日で映画を作るワークショップをその場で開催したエピソード(家成 2020: 45-8)は、場の使い方を考えるうえで印象的である。

ここまでを簡単にまとめたい。地域住民の自発的活動を支える、「既存施設」「一般的な建築設計」ととどまらないオルタナティブな「公共空間」「場」「集会所」の必要性を認識しながら、そのような場、そして場の使い方を含めた「状況」を地域住民自らでつくりあげていくこと——ここではさしあたり「状況の創造」と呼ぶ——が、UmakiCampの特徴である。

2-2 UmakiCamp の現状：フィールドワークから

次に、UmakiCamp の現状について、当日のフィールドノートを基に述べる。新型コロナウイルスの感染状況に留意しながら、フィールドワークを2022年5月14日に行った。まず、新型コロナウイルスの影響について。UmakiCamp は人が集まることを目的としているが、新型コロナウイルスの影響でなかなか集まらない時期が多かったと、当日利用していた方が立ち話のなかで述べていた。そうは言うものの、観光客や訪問者は少しずつ戻って来ているようであった。先述のとおり、建物の役割は、「みんなで集まって何かをする場」として捉えられている。筆者訪問時は、ひまわりの種を植えようと畑を耕していたところであった。また、2013年の建造以来、現在は建物の木の風味が変化しているようである。建物の前に植えられたオリーブが大きく成長していることも特徴である。筆者訪問時には、近所のオリーブ農家の方がふらっと立ち寄ってオリーブ剪定のアドバイスを管理者に行っていた。

家成は、「建築も娯楽も誰かに与えられるのを待ってはいけぬ。規模は小さくてもすべて自分たちで協力すれば、簡単な道具によって状況をつくり出せるという実験をしたかった」（家成 2020: 48-9）と述べる。新型コロナ禍が続く現在でもそのような「状況の創造」が続けられていることがわかる。



(写真) UmakiCamp の外観 (2022/5/14 筆者撮影)

3 UmakiCamp の意義

最後に、このような UmakiCamp の意義について考えよう。UmakiCamp を取り巻く代表的な言説・思想をまずは並べてみたい。家成は次のように述べる。

私たちは、国や地方公共団体から与えられるサービスを受け取る身体に慣らされている。それは私たち自身が、私たちの空間をつくることを疎外しているとも言える。また、立法爆発

と言われるほど新しい法律ができてきていることに現れているように、私たちを取り巻くさまざまなことはもはや専門家と言われる人しか読み解けない複雑なものになっている。理解できないことが前提となり、私たちはつねに受け手に回ることになる。仕組みや空間は上から降ってくるものではない。地べたから生えるものだ。私が暮らす地べたがあり、その地べたが連なり、私たちの日々の生活がある。(家成 2020: 4-5)

この発言は、UmakiCampにも通奏低音として流れる建築の思想、空間の思想を表している。国や地方公共団体によって「与えられる」仕組みや空間によって、私たちの日々の生活を営む空間の創造が疎外され、よそよそしいものとなる。だからこそ、「地べた」から仕組みや空間を、生活をつくりあげていくという思想が示される。このような「状況の創造」をめぐるとの思想は、他方で地域福祉の構想に接近することにもなる。当時の小豆島町長であった塩田氏は次のように述べる。

僕は、なぜ瀬戸内国際芸術祭を小豆島でやっているのかと聞かれたら、「アートが社会保障の問題を解決するから」ということをキャッチフレーズのように答えているんです。社会保障の本質的な問題は、人々が助け合う仕組みをいかに維持するかということなんですが、いまは権利ばかり主張するような社会保障制度の中で、お互いに助け合っているという実感が一人ひとりからなくなっていると思うんです。社会保障の問題を解決するために必要なものは、お年寄りのケアから子どもの面倒までをきちんとできる共同体としての強い絆だというのが僕の結論なんです。²

率直に言えば、「アートと社会保障」という問題構制については、この箇所を見る限りは慎重な検討を要する議論の建付となっているように思われる（特に「権利ばかり主張するような社会保障制度」の点）。ただし、その当否をここで論じる余力はない。他方で論点として浮かび上がるのは、そのような「共助」を推進する社会保障の構想と、「地べた」を重視する建築の思想が、島の中で、アートプロジェクトにおいて共振しているということだ。このように考えるならば、筆者の次の課題は、2-1で述べたような「状況の創造」、言うなれば「自主管理」（オートジェスチョン）の思想を整理すること、そのような思想が福祉国家に対してどのような批判の力を有していたかを整理すること、他方では、福祉国家の役割や機能の変容のなかで「共助」が（特に日本の文脈で）いかに捉えられてきたかを検討することにあるのではないかと思われた次第である。さらに言えば、そのような思想と実践が、地域社会におけるさまざまな〈アートプロジェ

2 2013.9.11「建築家・家成俊勝が、小豆島町長・塩田幸雄さんに聞く、「アートを通じた新しい地域社会のつくり方」『QONVERSATIONS』<https://qonversations.net/interview/783/>（2023/1/11 閲覧）。なお、「《UmakiCamp》は公共の土地ではなく、前小豆島町長の塩田幸雄さん所有の土地に建っている」ものであり、「大昔からあったであろう地区の連帯と、町の援助、公と私が連携しながら誰もが使えるコモンスペースができあがった」（家成 2020: 49）という背景も有する。

クト〉を背景として駆動し、編成されている可能性があること。これを見定める必要があると考えている。

【付記】

本報告は人間文化研究所マンデーサロン（2022/5/30）の報告の一部をもとに大幅に加筆修正したものである。

【文献】

家成俊勝, 2020, 『ドットアーキテクト 山で木を切り舟にして海に乗る』LIXIL 出版.

片桐新自編, 2000, 『歴史的環境の社会学』新曜社.

北川フラム・瀬戸内国際芸術祭実行委員会監修, 2022, 『瀬戸内国際芸術祭 2022 公式ガイドブック アートと島を巡る旅』現代企画室.

熊倉純子監修, 菊地拓児・長津結一郎編, 2014, 『アートプロジェクト——芸術と共創する社会』水曜社.

宮本結佳, 2020, 「場所と環境——人々はどうのように場所と関わるのか」木村至聖・森久聡編『社会学で読み解く文化遺産——新しい研究の視点とフィールド』新曜社, 72-7.